

平成 27 年度学校評価結果報告書  
(年度末評価)

平成 28 年 3 月 31 日

広島県立福山葦陽高等学校  
(定時制課程)

# 目 次

## 1 自己評価結果

- (1) 平成 27 年度自己評価シート（年度末評価）・・・・・・・・・・ 1
- (2) 平成 27 年度自己評価シート（年度末評価まとめ）・・・・・・・・ 4

## 2 学校関係者評価結果

- (1) 平成 27 年度学校関係者評価シート（年度末評価）・・・・・・・・ 6

平成27年度自己評価シート(年度末評価)

校番	012	学校名	福山葦陽高等学校	校長氏名	藤井 悦子	定時制	本校
----	-----	-----	----------	------	-------	-----	----

※ 評価基準 [A:目標を完全に達成した。 B:目標を概ね達成した。 C:目標をあまり達成できなかった。 D:目標をまったく達成できなかった。]

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当部等
		実績値	目標値	実績値			
1 「強く」 自ら考え行動することで、人生を切り拓いていくことができる確かな学力と体力を育成する							
生徒の主体的な相互活動を促すことにより、基礎学力が定着し、それを活用する姿勢が育まれている	1・2 年次定期考査(国語・数学・外国語)における基礎学力問題通過率の上昇	国語 (1年次 24%, 2年次 25%) 数学 (1年次 11.5%, 2年次 3.2%) 外国語(1年次 5.6%, 2年次 8.2%) アップ	国語 (1年次 19%, 2年次 21% アップ), 数学(1年次 5%, 2年次 7.1% ダウン), 外国語(1年次 16% 2年次 24%アップ)	B	・数学は通過率が下降し、目標値に達しなかったが、国語、外国語は達成した。	教務	
	定期考査での活用問題の出題率	-	各教科 100%	各教科 100%	A	・全ての教科で実施できている。出題方法も、レポート形式、キーワードを用いた論述等、単元に合わせたものとなっている。	教務
	検定試験合格者数	21	30	82	A	・目標値を達成した(合格者の内訳は、漢字検定2名、英語検定1名、情報に関する検定79名)。	教務 進路指導

【評価結果の分析】

- ・基礎学力の定着に関しては、生徒の特性によるが、教科によって得意不得意に差が出ている。特に数学に関しては、苦手意識の生徒が多く、基礎学力問題通過率が下降している。国語、外国語については、授業で定期的に振り返りの時間を設けたことが上昇の要因である。一方2年次生の学習意欲に減退が見られる。生活指導も含めた改善が必要である。
- ・既習事項の活用に関しては、定期考査では全教科において活用問題を出题しており、ほとんどの生徒はキーワードを出しておけばある程度論述ができる。また、不正解であっても答えを書こうとする姿勢が見られ、学びに対する向上心が見られる。依然として空白のまま手を付けない生徒が固定している。
- ・資格取得に関しては、一度検定試験に合格した生徒がさらに上の級や他の種類の資格取得に積極的になり、それが他の生徒の意欲にも影響している。

【今後の改善方策】

- ・基礎学力の定着に関しては、基礎的・基本的な問題については単なる反復に終わらせない工夫をしていく。2年次生については、過年度生が多く、これまでと違った傾向がある。学習意欲の向上に向けた取組をしていく。また、特別な配慮が必要な生徒への指導については保健美化部と連携する。
- ・既習事項の活用に関しては、より筋道を立てた論述や説明の仕方を学ぶため、授業で定期的に演習の時間を設ける。評価の規準を明示し、答えとして必要な要素を学ばせる。書けない生徒への指導方法を工夫する。
- ・資格取得に関しては、検定の種類と日程の周知を行い、計画的に受検させる。さらに補習や個別指導を行い、学ぶ意欲の向上を目指す。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当 部等
		実績値	目標値	実績値			
2 「正しく」自ら律し他者と協働することで、地域や社会に貢献していくことができる態度を育成する							
自己肯定感が高まり、社会性を身につけるとともに、勤労観・職業観を醸成し卒業年次の進路実現が図られている	「特別な指導」件数 の中での再指導率 (2回以上特別な指 導を受けた生徒の 割合)	20.4% (総数 49 件)	18%	19.4% (総数 103 件)	B	目標値 18%にわずか ながら届かなかった。	生徒 指導
	「挨拶向上実績度 数」の中で「毎日挨 拶をする」生徒の 割合	75%	80%	65%	C	目標値の 80%に届か なかった。	生徒 指導
	月間遅刻数が 1 以 下の生徒の数(年 間 11 以下)	18	25	22	B	前年度実績より改善さ れたが、目標値 25 に 届かなかった	生徒 指導
	生徒アンケートによる 生徒会行事満足度	—	70%	83%	A	目標値を達成できてい る。	保健 美化
	卒業年次の進路実 現率(%)	100%	100%	100%	A	卒業生16名全員の進 路が決定した。  <進路状況> 専門学校等 6名 就職 10名	進路 指導

#### 【評価結果の分析】

- ・「特別な指導」に関しては、特定の生徒が問題行動を起こしている状況に変化はなく、再指導者について、目標値の 18.0%に対してやや上回った。一方、指導の意味をしっかりと理解し、行動が劇的に改まった生徒もわずかではあるが出てきた。
  - ・挨拶に関しては、中学時代に不登校の経験者が多く、他人の視線や行動を過剰に意識している傾向の生徒が多い。アンケート結果では、毎日挨拶をする生徒の割合は、65%であり、目標値の 80%を下回った。
  - ・遅刻指導に関しては、目標値 25 名に届かなかったが、常時登校している生徒の中で 22 名が条件をクリアした。遅刻防止週間(12 月 H27.12.1~12.10, 1 月 H28.1.18~1.29) の期間は昨年度の同期間に比べ、1人当たりの遅刻回数の減少(12 月:2.09→1.76, 1 月:2.51→2.26)をみた。
  - ・生徒会行事に関しては、生徒会行事満足度は 83%で高く、目標値 70%を超えている。行事に参加する生徒は、行事を通して、ルールやマナー(聞く姿勢や時間を守るなど)が良くなった。また、他学年との交流も深めることができた。
  - ・進路指導に関しては、卒業年次の進路実現率(%)は、目標値 100%を達成した。
- なお、在学中の生徒の就労率(職場体験実習を含む)は、就労に関する LHR や就労講話、就労体験発表などを計画したこともあり、目標とした 70%を達成し向上しつつある。(1学期末 64.5%, 3学期中間 70.7%)

#### 【今後の改善方策】

- ・「特別な指導」に関しては、年度当初等、機会を捉え、校則について周知をし、期間を決め遵守させる指導を行い、規範意識の醸成を図る。特に問題行動を繰り返す生徒に生徒指導の三機能に基づいた取組を教員間で共有し、三機能のうち、「共感的人間関係を育成する」を特に意識して改善に繋げる。さらに、保護者を交えた三者懇談会を実施していく。
- ・挨拶に関しては、生徒会と連携し挨拶運動などの生徒による主体的な取組を検討する。
- ・遅刻指導に関しては、学期に1回以上の遅刻防止週間を設定する。また、三者懇談等を利用し家庭の協力を得、リズムある生活習慣の確立が大切であることを啓発していく。
- ・生徒会行事に関しては、満足度は高いが、行事に参加しない生徒が多い。集団行動が苦手な生徒もいるが、学校行事への関心を高める事前指導を工夫して、多くの生徒が参加できることを目指す。
- ・進路指導に関しては、卒業予定者、在校生へ早期からの個別対応を進め、全体指導を構築していく。保護者連携を深め、生徒の学校への定着や就職実現へ向けての理解を深める。「働きながら学ぶ」という学びのスタイルを早期から確立できる支援体制を充実させる。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当 部等
		実績値	目標値	実績値			
3 「美しく」 グローバル化する社会の中で、多様な人々となることができる姿勢を育成する							
地域に学ぶことを通し、社会的な視野を拡げ、他者と共生できる姿勢が身についている	「体験的な学び」における社会的な視野が広がった生徒の割合（生徒アンケートによる）	—	60%	100%	A	・目標値を達成している	教務 生徒指導
	校外清掃活動等への参加率	—	80%	75%	B	・校外清掃の参加率は目標値を下回ったが、希望者による福祉施設でのボランティア活動は8月、12月に実施した。	保健 美化

#### 【評価結果の分析】

・「体験的な学び」に関しては、主として「いよう定地域学」として行っており、3年次生以上が対象となるため、学習意欲が高く、前向きな評価が多い。2年次で一度減退する学習意欲が3年次で復調する傾向がある。外部とのふれあいを通して精神的にも成長する生徒が多い。

・地域のボランティア活動に関しては、校外清掃については、参加率が75%となり目標値80%を下回った。なお、延べ6名の生徒が8月、12月に福祉施設のボランティア活動に参加し、介護される側の視点を持つことの大切さ、感謝され繋がることの素晴らしさ等の体験を全校生徒に対し発表した。

#### 【今後の改善方策】

・「体験的な学び」に関しては、事前事後の指導を通して、単なる行事に終わらせない工夫をしていく。就職や進学指導につなげることで、一回一回の機会の重要性を認識させる。

・地域のボランティア活動に関しては、全校生徒が校外清掃活動を通して、周囲に感謝する行動や感謝される喜びを体験し、ボランティア活動への関心・意欲が高まり、地域へ貢献できる生徒の育成を目指す。

## 平成 27 年度自己評価シート(年度末評価まとめ)

校番	012	学校名	福山葦陽高等学校	校長氏名	藤井 悦子	定時制	本校
----	-----	-----	----------	------	-------	-----	----

## 1 評価結果の分析(成果と課題)

## ■「強く」自ら考え行動することで、人生を切り拓いていくことができる確かな学力と体力を育成する

各教科の基礎的基本的な分野について学び直しを行う…定期考査における基礎学力問題の通過率上昇

評価 B

目標値: 国語 数学 外国語各5%アップ(1学期→3学期)

中間時の課題…通過率改善へ向けた方策?⇒基礎的基本的な分野への振り返り

年度末の成果…特に個別指導を充実させた⇒**国語(1年次 19%, 2年次 21%アップ), 数学(1年次 5%, 2年次 7.1%ダウン), 外国語(1年次 16%, 2年次 24%アップ)**

既習事項を活用する演習を授業に取り入れ, 考査に出題する…定期考査での活用問題の出題率 目標値: 各教科 100%の出題

評価 A

中間時の課題…既習事項を活用?⇒既習事項を活用する演習を取り入れた能動的な授業

年度末の成果…既習事項を活用する演習を定期的に授業に取り入れた⇒**活用問題の出題は, 目標値 100%達成。不正解であっても答えを書こうとする姿勢が見られ, 学びに対する向上心が見られる。依然として空白のまま手を付けない生徒が固定している。**

国語, 外国語, 情報・商業検定を周知し, 受検を勧める…検定試験合格者数 目標値: 年度末 30名

評価 A

中間時の課題…検定の周知と受検者増をはかる?⇒検定試験へ向けた指導の充実

年度末の成果…個別指導の充実によって, 資格取得に積極的な生徒が増え, それが他の生徒の意欲にも影響⇒**目標値を上回り達成(合格者の内訳は, 漢字検定2名, 英語検定1名, 情報に関する検定 79名)**

## ■「正しく」自ら律し他者と協働することで、地域や社会に貢献していくことができる態度を育成する

校則の遵守, 規範意識の醸成…「特別な指導」件数の中での再指導率 目標値: 再指導率 18%

評価 B

中間時の課題…再指導者の減少?⇒生徒指導の三機能を取り入れた粘り強い指導

年度末の成果…担任, 生徒指導部による組織的で粘り強い指導⇒**再指導者について, 目標値の 18.0%に対して, やや上回り 19.4%。一方, 指導の意味をしっかりと理解し, 行動が劇的に改まった生徒もわずかではあるが出てきた。**

生徒主体の生徒会活動を行い, 行事への参加を通し, 社会性を養う…生徒アンケートによる生徒会行事満足度 目標値: 70%

評価 A

中間時の課題…集団での行動を苦手とする生徒の満足度が低い?⇒満足度を高める取組

年度末の成果…行事におけるグループ分けを工夫⇒**生徒会行事満足度は 83%で高く, 目標値 70%を超えている。行事への参加を通し, ルールやマナー(聞く姿勢や時間を守るなど)が良くなり, 他学年との交流も深めることができた。**

卒業予定者全員の希望進路を実現する…進路実績 目標値 100%(年度末):「進路実現率(%)」

評価 B

中間時の課題…進路目標の明確化?⇒日常的な個別対応, 継続した指導

年度末の成果…個々の生徒に対し, 進路指導部, 担任, 保護者を含めた日常的な連携⇒**卒業年次の進路実現率(%)は, 目標値 100%を達成した。なお, 在学中の生徒の就労率なお, 在学中の生徒の就労率(職場体験実習を含む)は, 目標とした 70%を達成し向上しつつある(1学期末64.5%→3学期中間70.7%)**

## ■「美しく」グローバル化する社会の中で、多様な人々とつながることができる姿勢を育成する

「体験的な学び」の実施を通して, 生徒の社会的な視野を広げる…体験的な学びにおける社会的な視野が広がった生徒の割合

評価 A

目標値: アンケート結果 60%

中間時の課題…実施が生徒の社会的な視野を広げる学習の機会となっているか?⇒事前及び事後指導の充実

年度末の成果…行事に対する興味関心を育む指導⇒**アンケート結果は, 100%となり目標値を上回った。主として「いよう定地域学」として行っており, 3年次生以上が対象となるため, 学習意欲が高く, 前向きな評価が多い。**

校外清掃等の実施を通し, 生徒のボランティア活動への関心を高める。…校外清掃活動等への参加率 目標値: 80%

評価 B

中間時の課題…地域清掃を通したボランティア活動?⇒ボランティア活動への積極的な参画

年度末の成果…地域のボランティア活動へ向けた情宣⇒**校外清掃については, 参加率が 75%となり目標値 80%を下回った。なお, 希望者による福祉施設でのボランティア活動は8月, 12月に実施し延べ6名の参加。**

## 2 今後の改善方策

■「強く」自ら考え行動することで、人生を切り拓いていくことができる確かな学力と体力を育成する

基礎学力の定着について：習熟に応じた丁寧な個別指導等単なる反復に終わらせない工夫をしていく。

- ・2年次生については、生活習慣の改善を含め、学習意欲の向上に向けた取組をしていく。
- ・特別な配慮が必要な生徒への指導については、保健美化部と連携し、指導の充実を図る。

知識の活用について：能動的な授業展開を行う。

- ・授業で定期的に演習の時間を設け、AL型の授業展開により、筋道を立てた論述や説明の仕方を習得させる。
- ・評価の規準を明示し、答えとして必要な要素を学ばせる。書けない生徒への指導方法を工夫する。

資格取得への取組について：検定の種類と日程の周知を行い、計画的に受検させる。

- ・補習や個別指導を行い、学ぶ意欲の向上を目指す。
- ・資格取得を促すことで、自己肯定感を高めるとともに、進路実現に繋げる。

■「正しく」自ら律し他者と協働することで、地域や社会に貢献していくことができる態度を育成する

校則の遵守、規範意識の醸成について：生徒指導の三機能を取り入れた粘り強い指導を継続する。

- ・年度当初等、機会を捉え、校則について周知をし、期間を決め遵守させる指導を行い、規範意識の醸成を図る。
- ・問題行動を繰り返す生徒に生徒指導の三機能に基づいた取組を教員間で共有し、三機能のうち、「共感的人間関係を育成する」を特に意識して改善に繋げる。さらに、保護者を交えた三者懇談会を実施していく。

生徒主体の生徒会活動を行い、行事への参加を通し、社会性を養う：生徒全員の行事への満足度を高める取組を行う。

- ・集団での行動を苦手とする生徒について、行事におけるグループ分け、実施日等、一人でも参加しやすい運営方法を工夫する。
- ・準備を計画的に行い、行事前の雰囲気づくりを行い、生徒の参加意欲を高める。

進路指導について：卒業予定者、在校生へ早期からの個別対応を進め、進路講演会等の全体指導を構築していく。

- ・保護者連携を深め、生徒の学校への定着や就職実現へ向けての理解を深める。
- ・「働きながら学ぶ」という学びのスタイルを早期から確立できる支援体制を充実させる。

■「美しく」グローバル化する社会の中で、多様な人々とつながることができる姿勢を育成する

「体験的な学び」について：事前事後の指導を通して、単なる行事に終わらせない工夫をしていく。

- ・地域の文化施設等への訪問学習を通して、社会的な視野を拓く取組を継続する。
- ・就職や進学指導につなげることで、一回一回の機会の重要性を認識させる。

地域のボランティア活動について：ボランティア活動への積極的な参画を促す。

- ・校外清掃活動等への参画を通して、ボランティア活動への関心・意欲が高まり、地域へ貢献できる生徒の育成を目指す。
- ・ボランティア活動について、発表の場を設け、生徒相互のボランティア活動への関心を高める。

## 3 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策(学校関係者評価実施後に記入する。)

- ・生徒に係る指導については、情報を丁寧に共有し、組織的で統一した指導を徹底するとともに、状況に応じて関係機関等との連携を行う。
- ・個々の生徒実態に応じて、就労と勉学の両立を促し、社会性を養い、自己成長する生徒の育成を図る。
- ・定時制ならではの、異年次の生徒集団による生徒主体の行事、部活動等を通し、生徒間の自己教育力を促し、定時制の活性化を目指す。

## 平成 27 年度学校関係者評価シート(年度末評価)

平成 28 年3月 31 日

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	藤井 悦子	全・定・通	本・分
----	----	-----	--------------	------	-------	-------	-----

評価項目	評価	理 由・意 見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	B	目標、評価指標、計画等の設定については、概ね適切である。ただ、数値目標については、計画を踏まえ、精緻なものにする必要がある。
目標の達成状況の評価の適切さ	B	評価指標に基づき、達成状況の評価は概ね適切である。ただ、達成状況の評価に具体を欠く項目がある。
目標達成に向けた取組みの適切さ	B	目標達成に向けた個々の取組みは、概ね適切である。育成すべき生徒像を踏まえ、取組を具体化するとより適切なものとなる。
評価結果の分析の適切さ	B	評価結果についての分析については、概ね適切である。ただ、なぜそういう評価結果となったのかを掘り下げ、具体をもつことが改善につながる。
今後の改善方策の適切さ	B	達成目標に対しての改善方策は概ね適切である。項目によっては、生徒の具体的な変容をもとに改善方策を示すとより良くなる。
総合評価	B	概ね適切な自己評価結果である。評価結果については、次年度の学校経営計画に反映させ、充実した定時制教育となるよう取組んでもらいたい。